

◆第7回ヘンデル・フェスティバル・

ジャパン (H F J) 演奏会

H F J によるヘンデル記念年特別企画の掉尾は、指揮に英国古楽界の重鎮クリストファー・ホグウッドを招聘したオラトリオ『陽気の人、ふさぎの人、中庸の人』。特に第三部

「中庸の人」を作曲者自ら『聖セシリアの祝日のためのオード』で置き換えた版に拠る希少な上演である。

何よりも国際人(コスモポリタン)ヘンデルの作品から馥郁と薫り立つ英国性(イングリッシュネス)に驚く。ミルトンの詩に拠るテクストが一見二

項対立風に描く「陽気」(現世謳歌)と「ふさぎ」(厭世と憂愁)とは、実は

表裏不可分の英国気質といえるだろう。ヘンデルの精妙な音楽は、これを育んだ「田園」という、この島の過去の記憶に満ちた独特の景觀を、そこに立ち上がる様々な詩的想

念を、光や風や鳥の声と共に鮮やかに描き出す。

H F J お馴染みの手練の演奏陣を的確にリードし、作品のこうした特質を見事に開示して見せたホグウッドの功績を第一に称えたい。(2月13日、浜離宮朝日ホール) (中野重夫)